

秀歌三十首十今年の収穫

田中徹尾

北極のおりは半分になるらしい向き合つて

かき氷崩しつづ 十一月号・駒田 晶子

処理水といひかへ捨つる福島のスナドリ人を

ばがにすんなよ 本田 一弘

ひゆるひゆると花火のあがり横長がたてなが

になる多摩川の空 十二月号・藤島 秀憲

逆算は楽しそうなり何がどう逆算なのかわか

らぬままに 細溝 洋子

消灯後かすかに聞こえる話し声許す最終日の

夜なれば 一月号・山口 明子

ありえない名前だけれど又行くの코리아キッ

チンぶたこたまがわ 菅田 恵子

淋しくて姿隠したわが眼鏡そつとしておこ

そのうち帰る 二月号・宇都宮とよ

ガザで泣く声を聞きたり答唱に「イスラエル

よ」と歌ひたるとき 大口 玲子

声に出しひいふうみいと数ふるは何数へても

愉し正月 三月号・伊藤 一彦

寝るときは寝るのがよろし目を瞑り何も思わ

ずすべて忘れて 田中 拓也

明太子こまマントヒビひなのちゃん「ん」が

ついたよもえちゃん負けね 水野 芳

蛤の椀にたつ湯気 今日午後は久々に春の

海を見に行く 四月号・佐佐木幸綱

人は逝く声の記憶を人に残し金子兜太も黒田

杏子も 加古 陽

元旦の地震なの壊しし能登の地の家族の時間思

えば苦し 蓬田 真弓

ジョーカーとハートの3を持ったまままてーブ

ルの下に子と潜りこむ 伊藤亜佐里

コーヒートの香りを嗅いで目ざめたかタブツキ

本棚より落ちる 五月号・佐佐木朋子

雨の冷え地に沁みとお椅子の足伝いてわれ

の背をのぼり来ぬ 奥田 亡羊

ラシャ鉢の突き傷ありし従姉妹の目に義眼を

さまる結婚写真 小澤 法子

父の手を握ったことなどなかりしに日課とな

りてひと月の過ぐ 六月号・俵 万智

セシウムを吸わせるために蒔かれたる菜の花

のことを思い出したり 河野 千絵

微笑みに似ているミモザを写しおり桜まつり

は名のみの薄暮 斎田 真希

十年の労をねぎらい自転車のベルを最後にチ

リンと鳴らす 志水千登世

枝垂れ桜などで撫でられくぐりをりやがて消

えゆくたましひふたつ 七月号・松本 実穂

みぎ、ひだり、まん中の穴に分別し時間を買っ

たカフェを出てゆく 鈴木 陽美

いい歌と言われなくても作者ならではの歌と言われればいい
八月号・久松 洋一
鉄製の扉あくたびすこしずつ夕陽を詰めてふくらむ車両
大谷ゆかり

先生はたぶんいつでも戦つてゐると思ひぬ世
界の岸辺で
高山 邦男
寝転びてゆつくりと四肢伸せば小気味よき
まで我瘦せにけり
九月号・馬場 昭徳

夏の香は夜をこもりみて手花火の玉のふるへの指をのぼりき
横山未来子
「いただきます」の声重なつて顔を上げ笑みを交わせり目の見えぬ義父
佐佐木頼綱

選歌の基準は「連作の中の一詩で注目する歌」と「一首としての立ち上がりがある歌」をどう選ぶかだと考えるが、今回、私は連作の中で一首を好んで選んだ。

この作品評は、結社誌の中の作品評である。作者の人となりから生まれた歌や、連作のテーマ選択が一番大事な観点だと思う。短歌は人である。作者を理解しないと歌は鑑賞できない。面識のない会員でも歌との出会いがあると思いは伝わってくる。

一年間作品評を担当して強く思ったことは、無選歌欄の会員と一般の会員とは作歌への意識に相違があるということである。例えば、元旦に発生した能登震災について、四月号に無選歌欄では三十六人中四人約一割が能登のことを詠んだが、一般会

員では、私の担当欄だけでも、ほぼ連作として六十九人中十六人約四分の一の会員が能登震災のことを詠まれている。

桜の歌についてみてみよう。七月号では私の批評対象に限ると、一般会員では六十五人中なんと二十二人約三分の一なのに、無選歌欄では、他の花の歌はあるものの三十八人中八人と二割しか桜を詠んでいなかった。

無選歌欄の歌人は、じっくりと自分のテーマやモチーフを大事にし、一方、一般会員は時事の感動を大事にしているのだと思う。無選歌欄の歌人は既に自分の作風を確立していて、安定している。一般会員には冒険心がある。そんな違いについて思いを寄せた一年間であった。

無選歌欄では、本田一弘、奥田亡羊、馬場昭徳、藤島秀憲、田中薫、細溝洋子、河野千絵、山口明子の歌に注目をした。それぞれ特色のある作品を詠まれていた。

一般会員について、ベテラン歌人では、テーマに独自性を持つ花美月、倉石理恵、蓬田真弓、矢代朝子、山本枝里子、加古陽、大谷ゆかり、武藤義哉、清水春美、尾上宏、武富純一、原口嘉代子の作品に心惹かれた。中堅歌人では、松本実穂、服部崇、志水千登世、菅田恵子、堤朱子、小澤法子、児島直美、岸並千珠子、久永草太、青山哲也、雨雨雨汰の作品を楽しんだ。
新人では齋田眞希、諏訪花、伊藤並佐里、坊真由美、水野芳、深尾早央里に注目した。益々の活躍を期待している。

秀歌三十首十今年の収穫

森屋めぐみ

夏雲の湧き立つような物語さがす午後なり雨
の図書館 十一月号・堀 亜紀

涼しがる風の行く手にあかあかと関東平野の
夕空がある しておとくや

大空をまるごと残し永遠にプテラノドンの旅
立ったまま 十二月号・大谷ゆかり

噛みしめて黙食しをりしみじみと味はふこと
は淋しきことか 鈴木 順子

草原に木の椅子ひとつきつぱりと人を捨てた
る輝きに満ち 島田 節子

「東岳二時の方向に鷹柱」双眼鏡が一斉に向
く 一月号・増田満美子

鉄塔を美しいなと思へる日人びとのため仁王
立ちせよ 高山 浩一

教会のようにみな目を閉じているeイヤホン
本店の三階 俵 匠見

なでしこの二番花くつたくなく咲きて勝手口
こそわが花の道 野見山鈴子

ゴッホの星賢治の星の真実を屋久杉の枝の奥
に見つける 二月号・福岡 享子

まぼろしの尾を振り立てて歩みゆく介護認定
調査員われは 井田 尚子

生と死の瓦礫の狭間を生きてなほどの子も未
だよきをさな顔 児島 昌恵

帰路急ぐコンビ二傘の二つ三つ反り返らせて
鯉起こし来つ 中田久実子

一輪の野ばら咲くごと病床に教科書を開く生
徒を思ふ 三月号・福田樹生里

左手の親指のやうな能登半島あまたの血管寸
断されて 四月号・松元 雅子

恋バナをジェンガのように積みあげて十七歳
百五十人の旅 五月号・片山佳代子

白梅の咲く庭をよぎりゆく子らの六年間を知
る道祖神 久保富紀子

生きるとは寂しきことと学校で学ばざれども
このさびしさは 丸山 稔

見ればもうビールの泡が消えている慰めるつ
てどうしたらいい 久永 草太

拝みて深呼吸する我らなり富士とは天への鳥
居と思ふ 六月号・田中 章義

ああ昔この店の仲居さんなりき十九の春の髪
をくくりて 梅原ひろみ

さえずりの木立ちを底無き溪谷を折り込んで
いく楽譜の内へ 七月号・堤 朱子

わが三十代の歌なし一つもなし睡眠五時間、
夜討ち朝駆けの 加古 陽

きのう産まれたひよこのオスはわれの手に黒
く鋭き眼を輝かす 諏訪 花

六本の弦から春の奈落からネクタイ黒き人の
ブルース 熱田 一俊

月が光をたみしのちの闇に馴れ沈黙に馴れ
孤りを生きる 片岡 直子

恰幅のよき火葬技師の制帽よとびらの奥に見
えぬ汽車あらん 八月号・松本 実穂

毛穴から皺からじわり満たされて干し椎茸を
思う夕暮れ 門田 祥子

春雨が降る道帰る今日泣いた理由を言う子の手は温かく
口笛 浦
歪みなき骨光らせて自転車走るとからひらくはつなつ
小林 賢太

毎月五日ほどをかけて「作品評」と向き合った一年だった。まず担当欄の下読みをして良いと思った歌、気になった歌に○をつける。毎回五十首前後のその歌の中から最終選歌で十六首に絞る。ここまでで三日。評を書くの一日。推敲に一日で五日間の工程である。もつとも選歌に丸一日を費やしたわけではないので、実質の時間はもつと短いのだが、気持ちの上ではいつでもどこかで「作品評」のことを思い続けていた。

今回この欄を書くに当たって、歌会で喋るように書くことを意識した。言葉を文語に変換することで、作品に対してのこの瞬間の自分の思いを止めないようにするためである。文章として物足りなく感じる方もおられるだろうことは承知の上で、そこ

は敢えて最後まで変えずに書かせていた。毎回十六首としたのも、一首の評の分量の納まりが丁度良かったからだが、そのために落とさざるを得なかった多くの作品には、今も心を寄せている。また今回はお一人一首の括りをせず「選歌ルーム」で取り上げられた作品を外すこともしなかった。その結果、二回三回と作品を選んだ方も複数になった。挙げだせばきりがなが堤朱子、堀亜紀、松本実穂、熱田一俊、諏訪花、門田祥子、福田樹生里、口笛浦の各氏は一年を通して注目していた方々である。

作品は、生命に迫るもの、自らの根源に踏み込むものから日常のちよつと笑える楽しい場面まで、偏りのないように選んだつもりである。時事詠や災害の歌、季節の歌も大切に選ばせてもらった。歌の輪郭、作者の輪郭が鮮明なものがやはり心に残る。歌が広げて見せてくれる世界、逆に一点に向かつて集中させてくれる世界、短歌には作者にも読者にもそれぞれの物語を構築する自由がある。時には「へわからない」という自由さえ与えてくれる。自由は苦しくて楽しい。だから短歌も苦しくて楽しいのだ。こと「作品評」に関しては、一年間は本当にあつという間だった。一言でも何かが誰かに届けば嬉しいと思いつつ、ありがとうございました。最後に九月号より。

- ・ひつそりと話しかければ切り花の紫陽花
- ・ぼつとあの世をつくる 岸並千珠子
- ・水遣りを雨に任せて眠る朝しいて言うならへぬんゝって気持ち 安野ゆり子

秀歌三十首十今年の収穫

服部 崇

南方の何処なりしか猿を食う輪に入らざりし
を祖父は語りて 十一月号・谷 ちえみ

将来は先生になると次女が言い猫になりたい

長女の絵日記

青木 泰子

この毒は甘いでしょうか柔らかくぬめる真白

き除草剤撒く

星野さいくる

戦時に兵が隠れし伊江島の大ガジユマルの台

風に倒れぬ

十二月号・安仁屋洋子

力学のはたらきにより周辺のひとつがときどき

飛ばされて消ゆ

長沼 通郎

口角を上げて目線は真直ぐにマニユアル通り

の仮面がある

一月号・児島 直美

にんげんのかたちには合はぬ曲線を描きて川は

地上を流る

関沢由紀子

小さき手が探りあてたる幼虫はムギ、モグ、スー

と名付けられたり

二月号・秦 千依

明日からはまた病院の人となる妹の影を鳩が
踏みゆく 原 ナオ

「今、ここ」と言ふ概念を教へられ今ここに

ゐて吾は苦しも

廣間 菜月

平家物語のごとし。花も 心も 科学も 三十

一文字も、ガザも

三月号・勝島 靖夫

土は土、ポストはポスト、雨に濡れ子は十三

歳の匂いを立てる

門田 祥子

水面から出ているワニの眼球が私の動きに合

わせてまわる

諏訪 花

機能性食品ばかりの冷蔵庫閉めてこれから首

吊りをする

四月号・安野ゆり子

孫と食む伊勢赤福の美味しさを記しておりぬ

父は日記に

田中 章義

洗顔のチューブが固くなる季節水ようかんが

祖母から届く

俵 匠見

しばしのち深き海より浮かび来る魚あり閉
架式の図書館 武藤 義哉

監視する眼につつまれた東京を菱喰たちが横

切っていく

五月号・松岡 秀明

ビルの上は空ばかりなる街をゆくビルの中に

川は流るる

水口奈津子

人の血を舐めたることもありしかと深き記憶

の森をさまよふ

松本 実穂

背を押して春に落つこととしてあげる誰にもわ

からないほど深く

六月号・福永 昭子

冴えかへる朝の御堂の薄闇に千の観音千のく

ちびる

小林 賢太

水槽のどじょう金魚が口を開けヨーグルト喰

む俺を見つめる

七月号・雨宮 孝祐

既読スルーの世界は柱ばかり伸び吹き抜けて

いく風の音聞く

東條 尚子

記者として大切なのは「聞く力」面接で学生に言いしこと恥ず 八月号・加古 陽
色とりどりの猫がわたしに寄ってくる靴下、
財布、鞆、手袋 清水あかね

25^歳 糠雨のような優しさで子犬の君へ打つ
細い針 久永 草太
野良猫の野性の誇りの茶々丸の威嚇に負けず
「フジャー」を返す 鷺沼あかね

三十までに死なむとすれば来週の締め切りが
ある来月もある 御手洗靖大
わたくしの初夏とあなたの晩夏とが重なりし
夏 鴨跖草の花 山本 陽子

一年間、本欄を担当し、会員の作品をこれまで以上に熱心に読む機会をいただいた。選歌に当たって気をつけたことは、特

にない。惹かれた作品を惹かれるままに紹介した。ただし、各選者が特選欄に選んだ作品は省いた。また、選歌ルームに取り上げられている作品も、確認の上、省くようにした。選んだ作品を読み返してみると動物の宝庫であった。

動物では哺乳類(猿、象、キリン、猫、犬、兎)、鳥類(鳩、鴉、鶴、ジョウビタキ、鴟、菱喰、鶯)、爬虫類(海亀、ワニ、蜥蜴、ヤモリ)、魚類(鮫、鮭、鯛、どじょう、金魚)、甲殻類(サリガニ)、昆虫類(蟬、カマキリ、蚊、蜚、熊蜂、蝶)を選んだ。両生類は選び損ねた。

また、選んだ作品には人名が用いられているものがいくつかあった。プーチン(元首)、ニーチェ(哲学者)、ホーソーン(文学者)、ゴーギャン、ルソオ、スーラ(画家)、大谷(野球選手)である。

植物では裸子植物は選ばなかった。被子植物の双子葉植物からはバラ科(薔薇、桜、林檎、苺)、ウリ科(胡瓜、メロン、西瓜)、アブラナ科(蕪)、スミレ科(菫)、クワ科(ガジュマル)、マメ科(藤、萩、葛、烏野豌豆、隠元)、ミカン科(蜜柑、檸檬)を選んだ。これ以外にもロウバイ科(蠟梅)、ミソハギ科(柘榴)、センリョウ科(千両)、キンポウゲ科(アネモネ)、ナス科(茄子、ピーマン)、あるいはキク科(牛蒡、デイジー)、サクラソウ科(万両)、シソ科(ホトケノ

ザ)、ウコギ科(ヤツヅメ)、キキョウ科(釣鐘人參)を選んだ。単子葉植物からはユリ科(カサブランカ)、ラン科(デンデロビウム)、イネ科(玉蜀黍、葱)、ヒガンバナ科(葱)、あるいはバショウ科(バナナ)、ツククサ科(鴨跖草)を選んだ。

今回、毎月選んで来た作品の中から三十首を選ぶ作業を行った。この作業では惹かれる作品を多く落とさざるを得なかった。最後に九月号より。
・顔あげてそつぎようですと告げられて最後の管の驚く長さ 太田 裕万
・栗の花日ごと色濃く匂ひくる窓を開けたりひと怒らせて 梅原ひろみ
・諦むること重なりて野薊を血と染まりゆくまで踏みしだく 佐藤 博之

秀歌五首選

久松洋一

- ・本棚のさいごにのこす一冊は竹山広全歌集だろう
- ・どの駅にも伝言板のありし頃声あげ笑うこと多かりき
- ・人は逝く声の記憶を人に残し金子兜太も

井上 俊英

谷 ちえみ

黒田杏子も

加古 陽

- ・津波来る早く逃げてと言う声をばあちゃん聞いたか聞いて逃げたか

浅田 早紀

- ・週に二度座る事務所の事務椅子の高さ来るたび上げ下げしおり
- ①無人島へ持っていく一冊、棺に入れて

倉石 理恵

もらう一冊。人には、様々な一冊がある。「竹山広全歌集」というのが、嬉しい。②作者の青春時代の記憶とともに、甦る伝言板。伝言板の前での待ち合わせ。伝言板に書かれた白墨の筆跡。③声の記憶は、また会いたい人への思慕でもある。④当事者の歌ならではの、臨場感、切迫感。⑤常勤と非常



勤の差の一つは、専用の椅子と共用の椅子の違い、でもある。

駒田昌子

- ・ だくだくと流されてゆく老木の梢の先に見える一瞬 清水 春美
- ・ では又と丁重に電話を切りて後細切りチップスを猛然と食む 藤田紀美子
- ・ 石臼を温めておくばあちゃんがいないけど蓋しんさい言いいよ 秦 千依
- ・ 烏骨鶏の卵の殻のほのあをさ 誰もな割りそ何もな生れそ 山口和賀子
- ・ もて余す身をペン立ての縁に掛け戦力外のホチキスである 川又 和志

清水作、「線状降水帯」なるものが出現し、川のうねりの中に見える一瞬を捉える緊張感。藤田作、上句と下句の場面の移り変わりに浮かび上がるドラマ性。秦作、下句の方言のあたたかさ。聞こえないけれど、聞こえる。山口作、「な…そ」の二度使いが印象的。命や美への作者の祈りを感じる。川又作、ホチキスに見出すペーソス。こんなホチキス、わが家にも、あります。

屋良健一郎

- ・ 山なみにあふむく巨人の口ありて夕日の館のどろけゆきたり 小澤 法子
- ・ 本の抜きあととさみしいから伊藤左千夫が一彦へともたれる 志水千登世
- ・ 山抜けて青に撃たれる 真鶴の海に孵化した夏にまた逢ふ 福田樹生里
- ・ 茎だけになった胡蝶蘭 花だったことを静かに語りはじめ 須藤 歩実
- ・ パキパキと割り箸をわるおちこちに元総長も町内会長も 山中 蕾

引用順に七月、一月、八月、五月、七月号より。小澤作、スケールの大きな上句と幻想的な下句。志水作、多用された句跨りが「もたれる」様子とよく合う。左千夫と一彦の組み合わせはなんだか五十音順をこえた説得力がある。福田作、二句目と「孵化した夏」という表現が魅力的。須藤作、植物を詠みつつ人間にも通ずる味わいがある。山中作、同じ弁当の前では経歴は無化され皆が対等な存在。一種のアジールか。

関沢由紀子

- ・ 「多様性の共住」などと言う父にネズミの害を懸命に説く 高橋 秀
- ・ 慣れぬ駅に「心の花」の札を持つ人が居りたり身内のやうに 篠田和香子
- ・ 搦き手なる従兄弟ら揚々とやつてきて菊水がぶり飲んで青空 秦 千依
- ・ 給食のお代わりじゃんけんパーを出し勝ちてグーを突き上げたり 海上 直士
- ・ ユメカサゴの刺身、唐揚げ舞えば龍宮城は駿河湾にあり 田中 章義

高橋作、ネズミに寛大な父上。篠田作、昨年十一月の「心の花」記念大会の「コマ、結句がいい。秦作、親族が集まった新年の餅つき。海上作、給食のお代わりを争う子どもたちの弾けるようなエネルギー。田中作、圧倒的な豊かさを感じさせる駿河湾。海外に目を向ければ終わりの見えぬ紛争、国内に目を向ければ甚大な自然災害と、厳しい状況の一年であったが、思いのほか身近には豊かさがあつたと思う。

山口明子

- ・ひるがえり秋のスケートボード飛ぶ風のようなる少女を乗せて 佐佐木幸綱
- ・他人より自分同士を比べたい過去に負けたら過去を褒めよう アダムス理恵
- ・午前九時今日も蝉の音激しくて八月始め夏が極まる 伊東 美穂
- ・歌の意を優しく深く汲み上げる俵万智とはそういう人だ 柴山与志朗
- ・夕刻のにび色の空に大き虹残していきぬ初夏はつなつの雨 篠田和香子

一首目。爽やかさや躍動感を感じさせる秋の名歌。二首目。自律神経を癒し読者を励ます。この他「終わらない苦しみはない永遠の喜びもない今日がはじまる」「一日に終わりがあるから頑張れる上手に今日を溶かす夕焼け」等の歌も心に沁みだ。三首目。「午前九時」から「夏が極まる」と捉えた作者の感性に注目した。四首目。読みの名手でもある俵氏の事を的確に表現している。「深く」がいい。五首目。雄大で色彩豊かで美しい情景が浮かぶ。擬人法が効果的だ。

加古陽

- ・おほかたの雨はわたしに漂着す梨むけば夜のたれて来るなり 岸並千珠子
- ・積み上げし土の斜面にシヨベルカーおのれの影を倒して休む 松橋 雅美
- ・蝶いち羽まひきてあそび庭を去ぬ侵攻の意図なきものは美し 間宮 清夫
- ・電燈に黒布かぶせし管制下 桐壺、帚木、読みはじめたり 長谷川静枝
- ・その傷を見せてよ見せてほしいだけ触りも治しもしないからお願ひ 福永 昭子

岸並作。海に成り代わって詠んだような大きさと、夜の室内の微細さ。詩的イメージが広がる。松橋作。「影を倒して」がさりげなく、うまい。間宮作。庭の光景を詠みつつ、海外の戦争、紛争を想起させる社会詠。長谷川作。灯火管制下で谷崎版『源氏物語』を読んだ戦時下の思ひ出。戦争体験者の少なくなる中、貴重な一首。福永作。年間を通じて、ユニークな視点の歌で楽しませてくれた福永さん。遠慮のない詠みぶりがいい。

加藤由かり

- ・離陸する一瞬が好き かがやきてたちまち遠くなる滑走路 佐佐木幸綱
- ・帰りゆく場所をなくしし人々にぼたん雪降るすきまなく降る 碓 博視
- ・蟹シャボテン咲く日だまりを手にすくい雪の輪島へ届けまほしけれ 松森 邦昭
- ・リッシュンはちよつとフレッシュのびをする草もわたしも一緒にリッシュン 田中 和美
- ・両枝に小鳥を抱ふる姿なり「来」の中には春の来てをり 浜田ゆり子

佐佐木作。一月号第一首目。前途への期待感に読み手を高揚させる。まさに新年の歌。しかし時をも選ばぬ残酷さで能登半島を襲った地震。被災者を悼む多くの作品の中から礎作と松森作を。能登は秋にも多大な豪雨被害を受けた。一日も早い復興を祈る。田中作、立春を片仮名で書くところなどに楽しいのだと発見。リズムカルな韻もよい。浜田作、こちらは文字の楽しい発見。二首とも悲しみを癒す希望の春の歌と読んだ。

笠巻睦

- ・既読にはならないままで組板の傷に沁み込ませる漂白剤 福永 昭子
- ・くれないの睦月の椿一輪のはたと落ちたり細き雨降る 小宮 教子
- ・妹のことばかりなり母からの電話に告げる明日の引越し 原 ナオ
- ・初めから負けていたのだ六条の闇に降り来し若き月夜見 清水あかね
- ・その傷を見せてよ見せてほしいだけ触りも治もしないからお願ひ 福永 昭子

「きゅんとする」歌を集めてみた。福永作、漂白剤が沁みているのは作者の心だ。小宮作、上の句の語順が鍵だ。「くれない」の残像が読んだ者の脳裏にずっと残る。原作、自分にも関心を寄せてほしいという母恋いの歌。清水作、六条の御息所の苦しみと諦めが切ない。もう一首福永作、傷とは心の傷だろう。拒絶されている作者。拒絶しているのは十代の少年かも知れない。福永氏は「きゅん」の名手だと思う。

青山仁

- ・OSO³8 駆除されし後牛たちのピンクのげつぶ夏を熱くす 関沢由紀子
- ・コピー機の紙の詰まりに見ぬふりをした来た罰かこのアジフライ 藤島 秀憲
- ・戦闘が止まねば「ガザに入れない」「相当先だな」でも行くでせう

武石いずみ
戦力外通告の野手の記事上にドラフト指名の学ランが笑む 藤原 靖子
・ジョーカーとハートの3を持ったままテールブルの下に子と潜りこむ 伊藤亜佐里
関沢作、罷に襲われなくなった牛が、げつぶで地球を襲うという皮肉の一首。藤島作、不味いアジフライを些細な悪行(?)の罰としたところが面白い。武石作、時事詠だが、「でも行くでせう」に夫婦の仲の良さが見える。藤原作、淋しく球界を去る者を「学ランが笑む」が残酷にとどめを刺す。伊藤作、穏やかな正月に突如襲ってきた地震。「ジョーカーとハートの3」がリアルさを強調している。

久永草太

- ・幸せはクマも出なくてミサイルも飛んでは来ない秋の長崎 金子 哲也
- ・肋骨の鳥籠のなかに棲み付いた鳥にわたしの罪を喰わせる 雨雨 雨汰
- ・間引くとは悲しき言葉白き根の抱える土を指でほぐせば 門田 祥子
- ・焼香をつまみて指はつきつきに水飲む鳥のごとく去りゆく 高良 真実
- ・休みなく動き続けてぼっくりと冷蔵庫死す鯖は二度死す 志水千登世
- ・金子作、何かが「ある」幸せではなく、何かが「ない」幸せを祈らねばならないことを鋭く指摘している。雨雨作、肋骨の内臓と、そこに棲まう鳥の嘴の痛々しさが良いミスマッチ。門田作、下句の「抱える」という動詞に植物の意志を感じて恐ろしい。高良作、鳥の去り方と死者の記憶の消え方は似ているのかもしれない。志水作、「鯖は二度死す」にハツとする。死してなお死ぬとはいかなる悲しさか。

しおせとくや

- ・病院の荷物のなかに残っていたペットボトルの水を捨てたり 川又 和志
- ・この窓を左右に開き本年の空の青さとあいみよんを聴く 須原 城
- ・コスプレのミニスカートの後ろより狐の尻尾白く揺れおり 東 美和子
- ・過去世から旅を続けて来たること黄砂ふる日の街を歩めり 佐々木寛子
- ・焼香をつまみて指はつぎつぎに水飲む鳥のごとく去りゆく 高良 真実
- 川又作。ペットボトルの水を捨てる短い時間だが、この形でしか語り得なかつた時間が一首に流れている。須原作。「本年の」のかしこまつた感じと、下の句の取り合わせが清々しい。東作。尻尾に焦点を絞つつ、コスプレの後ろ姿を読者にイメージさせる。佐々木作。終末感が漂う。仏教用語が効いている。高良作。指の動きの一部だけにフォーカスした結果、イメージが広がった。

高山邦男

- ・女性的／男性的なる表現はワイン用語より即消えるべし 松本 実穂
- ・それぞれの声と体を光らせて人は働き鳥ははばたく 大口 玲子
- ・恋人との別れ方なら五十通り妻とのバトルは百通りある 加古 陽
- ・正確なるドローン攻撃続きをり蠅叩くより簡単といふ 伊藤 一彦
- ・豆撒きが出来ないからか監獄は鬼の看守が闊歩している 山田 英夫
- 松本作、繊細な社会問題をワイン用語で表現して洒落ている。大口作、輪郭が確かな彫刻のようで、普遍的なスケール感のある作品。加古作、ポール・サイモンのヒット曲を踏まえ、五十と百、恋人と妻の対比が愉快。伊藤作、現代の戦争を描く。「蠅叩き」というアナログ感に説得力がある。山田作、「豆撒き」に絡めて刑務所の様子をユーモラスに描いて楽しい。

佐佐木信綱 全歌集

佐佐木幸綱 監修

新派歌人の時代(25歳〜42歳)から
充実期(43歳〜73歳)を経て、
熱海時代(74歳〜92歳)に至る

佐佐木信綱 全作品を収録



●A5判上製 定価 5,000円 (税込)

ながらみ書房

〒101-0061

東京都千代田区三崎町 3-2-13 秋和ビル 406

Tel. 03-3234-2926 Fax. 03-3234-3227

mail : nagarami@jasmine.ocn.ne.jp

アンケート

- ① 今年一番うれしかったこと
- ② 今年一番と思う歌集
- ③ 今年一番の自作一首
- ④ 今年一番の参加歌会の出来事
- ⑤ 今年一番印象に残った社会的出来事
- ⑥ 十年後の社会のイメージ
- ⑦ 来年ぜひやりとげたいこと

佐佐木朋子

- ① これまで知らなかったことを発見して、バラバラに見えていた事象が繋がっていたことを発見したり、調べ物をしていて、うまい具合に証拠が出て来たときは嬉しくなります。そんな体験が幾つもありました。
- ② いただく歌集は読みますが、優劣は付けたくありません。
- ③ ありません。
- ④ 歌会に出席していません。
- ⑤ 社会生活をしている感覚が希薄で、社会

生活はしていないかもしれませんが。新聞は読み、ニュースは国内外のものを視聴しますが、何かにアンガージュすることもなく一年を過ごしました。

- ⑥ ヨーロッパの経済的、文化的な地盤沈下が進み、アジアでは民族間の小競り合いや、軍事紛争が多発する。海面上昇が今よりひどくなっている。そういう社会でも人間はかなりノンビリと暮らしていると思います。
- ⑦ 「波蘭懐古」という第二次大戦時に学徒兵によく歌われたという軍歌があります。その誕生秘話を長いこと調べていて、いろ

いろな方達からお力をいただきました。百年以上前の貴重な資料を発掘しお教えくださった後神先生に読んでいただきたいので、早くまとめたいと思っています。

谷岡亜紀

- ① 『鑑賞#佐佐木幸綱』を出せたこと。『〈劇〉的短歌論』『佐佐木幸綱』『言葉の位相』『歌人の肖像』に続く五冊目の評論集で、歌集・詩集・エッセイ集等を含めた刊行物としてはいつの間にか十八冊目となる。ただこの本は、「嬉しかった」という

よりも、微力ながらなんとか「責任」あるいは「約束」を果たせたという思いが強い。あと、日々感じている「嬉しい」こととしては、「心の花」の一員として短歌や文学に日々関わっている事、ある程度好きながら人生を送らせてもらっている事、生きてこの世の一員に加えてもらっている事、生きたりなど。ほんと、感謝しています。

⑥自分の人生を含めて、どうなっているのか、どこで何をしているのか、まったくわかりません。

⑦先日、遅ればせながら旧満州に関わる評伝『李香蘭』を読んで、母の生まれたハル濱、母が十代を過ごした大連に行きたいという思いを強めている。

森部信次

①去年に続き「ほろ酔いインタビュー」に参加させていただいたこと。先生手製の真鯛の昆布じめが美味かった。

②『Mother』高山邦男・ながらみ書房
・発条が最後に鳴らす「チ」の音のやうに動きぬ母の左手

高山さんのご母堂には「武蔵野歌会」の

暑氣払いや忘年会でお会いした。故郷の愛知県新城市のことや卓球のことを話す穏やかな笑顔が高山さんの歌に重なってくる。

③おみなごの背筋の凛々し流鏑馬はポニーテールの人馬一体

五月・浄智寺歌会にて
古希を過ぎめつきり仕事が減った。量子コンピュータ記事や社史編纂などだば鯨のように注文を受けている。今年は日本の伝統美の連載が入り、鎌倉の流鏑馬の取材で心が洗われた。

④武蔵野歌会が十周年を迎えたこと。一四年十一月に高山さんが始めた会は、二十人を超えるまでに発展している。

⑤中東に拡大する戦火。台湾海峡や東シナ海もきな臭い。日本は不戦を貫かねばならない。

⑥スマホとAIの行きつく先が見えない。たぶん、あまり愉快でない社会が訪れるのだらう。

⑦七十五歳になり、人生をまとめること。

山本枝里子

①徳島ペンクラブと徳島新聞社主催の「と

くしま随筆大賞」の実行委員長にいきなり推挙され就任。チラシ作りや後援申請、作品募集から一次審査、最終審査、表彰式までを奔走しつつ取り仕切り、大きな問題もなく無事にやり終えたこと。そして関係者の方々に褒められたこと。

②『六月の鏡』河野泰子 六花書林

③わが子のやうに銃をかかへて兵士去るガザの学校空爆の後

④徳島歌会百回記念イベント「佐佐木頼綱講演会」の後で開催した徳島歌会。頼綱講師が、すべての歌にコメントしてくださって、出席した皆さんがとても喜びました。

特に心の花の選者の方々が採らない傾向の歌のポイントを教えてくれたのがありがたかった。

⑤元日の地震と、その再建途中の能登半島を襲った豪雨による被害。

⑥人口が減り、地方の土地まで外国人に買い叩かれ、多くの物が高騰し、ますます生活が圧迫されている気がしている。

⑦自己最高の歌を作りたい。評論もコンスタントに書いて発表したい。第四歌集の準備をしたい。

矢代朝子

- ①数年ぶりの映像の仕事。舞台とは違う撮影現場の緊張感に、心身対応できたこと。監督さんオーダーのお蔭で、自分の芝居がアップデートされたこと
- ②加古陽『夜明けのニュースデスク』ながらみ書房 職業詠の面白さを感じた。
- ③事実とは異なる我が作られて活字にされる気持ちの悪さ 「心の花」七月号
某文筆家から受けた「災難」に対して思わず詠んでしまった一連の憤慨の歌を、斎藤佐知子さんが特選に選んで下さった。心情も察して頂き救われた。
- ④司会ミッシヨンのスタート月だった四月東京歌会。幸綱先生登場、結社における歌会のあり方についてお話があった。それを再認識できたことで、司会に対する不安が薄らいだ。
- ⑤袴田事件、裁判、無罪確定までの一連。人の一生とは何か、人権、死刑制度、考えさせられることがあまりにも多かった。
- ⑥明るい未来からは程遠い、ネガティブなイメージしか浮かばない。益々深刻になる

地球温暖化、異常気象がもたらす自然災害、少子化問題。今後は防衛増税など、政権が行き当たりばったりで決めた国民負担もさらに増える。唯一の救いは、被団協のノーベル平和賞受賞で、十年後の世界の希望の光と思いたい。

⑦断捨離。どこまで処分できるか。すつきり老後を過ごす準備開始。

服部崇

- ①第二十四回心の花賞を受賞したこと。たくさんのお祝いの言葉を頂戴したこと。
- ②一年中花を咲かせるセラニウムそんな人に媚びなくていい
高山邦男『Mother』ながらみ書房
- ③照らされて暑き真昼の路を行くところ
ころに穴があいてゐる
心の花四月号
- ④「台湾短歌大賞(日本台湾交流協会台北事務所主催)」を企画し、実施した。開催に当たっては台湾歌壇、台湾日本人会の協力を得た。三月三日の授賞式では三原由起子さんとともに講演を行った。三原さんの第二歌集『土地に呼ばれる』から何首か引き

つつ台湾の魅力などを語り合った。

⑤一月十三日、台湾の総統選挙にて頼清徳(民進党)が当選。

⑥猛暑または極寒。

⑦日本への帰還。東京歌会に参加したい。

堀亜紀

①本田一弘先生に年間選者賞をいただけたこと。以前から関心のあった二・二六事件について自分なりの思いをこめたが、このような形の連作を作ったのは初めてだったのでいいのだろうかと不安な気持ちで提出したところ、本田先生にあたたかいお言葉をいただきとても嬉しかった。

②『Mother』高山邦男著 ながらみ書房

③澄み渡る青だったろう 剥製のかわうそと見上げる大正の空 心の花7月号

④木曜会が閉会したこと。とても残念だが

佐佐木由幾先生がお始めになったと聞く伝統ある歌会で毎回楽しく学ばせていただいた幸せをかみしめている。ご指導くださった宇都宮とよ先生、そして会の皆様にかから感謝申し上げます。

⑤一月一日に起った能登半島地震。復興も

なかなか進まない中、九月に豪雨による水害があり仮設住宅にも大きな被害があった。

⑥デジタル化がますます加速していると思う。アナログ人間の私はどうなるだろうと不安が大きい。

⑦持ち運びしやすい弦楽器であり難しくないものを何か少し弾けるようになりたい。

吉見恵美子

①娘が目標を立てて頑張ったピアノのミニコンクールで入賞したこと。群黎賞をいただけたこともうれしかったのですが、こちらは未だ驚きの方が勝っています。

②佐藤博之さんの第一歌集『残照の港』(ながらみ書房)

知っている方が歌集を出されるとというのが初めてだったので、ドキドキしながら読みました。

打球音響き上がりぬ。スタンドにボールが届くまでの静もり

佐藤博之『残照の港』ながらみ書房

③灰白い桜と思う緊張を隠す少女のほっぺ

のような 心の花7月号

④年明け最初のZOOM歌会の題「発つ／起つ」が「辰年」とかかっていたことに詠草を読んでから気づいて大興奮だったので

すが、みなさん普通に気がつかれていたので全然誰も驚いていらっしやらなかったこと。

⑤日本バスケットボール男子のパリオリンピックでの活躍。

⑥夏の暑さがえらいことになっていそう。

⑦引越して九年ほどたつのですが、まだ開けていない段ボールをいい加減片づけたい!

桐谷文子

①山梨県立文学館で幸綱先生のご講演を聴き、その後、甲府なぎの会と東京歌会有志と会食したこと。

②『はるかなる虹』

小島ゆかり 短歌研究社

③黄の色の実を多につける花梨の実 母の墓参を果たせてぬない

心の花1月号

④谷岡亜紀氏をお招きしての歌会に見学者

が数名参加し、その後入会したこと。

⑤知床岬での携帯基地局整備が断念されたこと。

⑥生成A1が進化して人と人との関係が希薄になる。

⑦いただいた歌集へのお礼状を書くこと。

俵万智

①野田秀樹作・演出の舞台「正三角関係」の稽古場見学記を書いたこと。原則公開しない稽古場に入り放題、見放題、幸せすぎた。

②『命の部首』(久永草太・本阿弥書店)

③形式とっておりにし線香の煙は空へ届く ひらがな

④東北歌会に初参加。やはり対面で歌の仲間と語りあうのはいいなと思いました。来年も、ぜひ。

⑤大谷翔平選手の50―50達成。闘病中の従姉妹が無理を押し見て行った試合でした。

⑥どんより時々晴れところにより雷雨

⑦言葉についての新書をコツコツ書いてるので、それを仕上げたいです。